

心願の國(2009)

混声合唱とオブリガート・ヴァイオリンのために

1. 夜あけ近く、……
2. ふと僕はねむれない寝床で、……
3. 僕は日没前の街道を……
4. 僕は今しきりに夢みる。……

テキスト：原民喜(1951)
作曲：高橋悠治

各声部には*solo*と*tutti*の区別がある

3種類の声の使いかたー

語りは "[]" の後にことば

parlando (語るように) は三角の譜頭 ↑ ↑

cantato (歌われる) は普通の音符 ♩ ♪

心願の國 (原民喜)

violin obligato / 混声合唱
(2009)

高橋悠治

1. *senza tempo*

Violin *mf*

Vln. *p*

Vln. *a tempo* ♩ = ca. 60 *mf*

A *tutti mf*

T *tutti mf* *parlando* *mf cantato*

夜あけ 近 く 僕 は寢床のなかで 小鳥の 啼 声 を

senza tempo

Vln. *p*

S *tutti f*
きいてゐる。

A

T

Vln. *mf*

B solo (語り)

【あれは今、この部屋の屋根の上で、僕にむかつて啼いてゐるのだ。

a tempo

Vln. *mf*
S solo (語り)
【含み声の優しい鋭い抑揚は美しい予感にふるへてゐるのだ。
pp

A *p* *mf* *p*
小鳥 たちは 時間の なかでも 最 も 微妙な 時間を感じ とり

T *p* *mf*
小鳥 たちは 時間の なかでも それを無邪気に合 図

B *tutti* *p*
なかでも

Vln.

T *parlando* *cantato* *mf* *p*
— し あっ て いるの だろうか。 今にも 僕は あの小鳥たちの こ と ばがわかり

B solo 【僕は寝床のなかで、くすりと笑ふ。

Vln.

S *mf* *p*
さう だ、 — もう少しで、 —

A *mf* *p* *mf* *p*
さう だ、 もう少しで、 — わ か る か も しれない。

T *mf*
さう なのだ。 もう少 して 僕には

senza tempo

Vln. *mf*

S *tutti* 【僕がこんど小鳥に生れかはつて、

S *solo* 【その時も、僕は

A *tutti* 【小鳥たちの国へ訪ねて行つたとしたら、

T *solo* 【僕は小鳥たちから、どんな風に迎えられるのだろうか。

a tempo

Vln. *a tempo*

A *mp* S *tutti* 【隅っこで指を噛んでゐるのだろうか。
子供のやうに_____

T *p tutti mp* T *solo* 【あたりを
幼稚園に はじめて連れて行かれた 子供のやうに_____

B *tutti parlando cantato p.* *mf* *mp* *p.*
それとも、世に 拗ねた 詩人の 憂鬱 な眼ざし で、

senza tempo

Vln. *senza tempo*

S *a tempo tutti mf mp* *mp* *mp*
だが、駄目なんだ。そん な こと を し ょ う

A *tutti mf mp* *mp* *mp*
だが、駄目なんだ。そん な こと を し ょ う

(T *solo*)じっと見まわさうとするのだろうか。

senza tempo

Vln. *mf* *p*

S たって、

A たって、

T *tutti f* *a tempo*
 僕はもう 小鳥に生まれかはって いる。

B *tutti p*
 小鳥に 生まれ かはって いる。

Vln. *pp*

B

a tempo

Vln.

S *mf* *p* *f* *fp*
 湖水のほとりの森の径で、 いまは小鳥になって いる

A *mf* *p* *f* *fp*
 ふと ぼくは いまは小鳥になって いる

T *mf* *p* *f* *fp*
 ふと ぼくは いまは小鳥になって いる

B *f* *fp*
 いまは小鳥になって いる

Vln. *mf*

S *mf* したしかった者たちと

A *mf* したしかった者たちと

T *mp* 僕 の *p* 出あう。

B *mf* 大勢 出あう。

Vln. *senza tempo* *p* *mp* *pp* *a tempo* *f*

S solo 【「おや、あなたも……」】

T

B solo 【「あ、君もみたのだね」】

Vln. *p*

S *mf* *p*

A *mf* *p*

T *mp* *p*

B *mp*

何かに魅せられたやうに、 この世ならぬものを——

何かに魅せられたやうに、 この世ならぬものを

寝床のなかで、 この世ならぬものを——

僕は——

S

A *mp*

T *mf* 3 3

B *mp*

考え 耽つてゐる。

ぼくにしたしかつたものは、

考え 耽つてゐる。

S *f* 3 *gliss.* *mf*

A

T *f* 3 *gliss.* *mf*

B *mf* 3

ぼくからほろび去ることはあるまい。 死——

ぼくからほろび去ることはあるまい。 死が

死が ぼくを

Vln. *mf*

S *f* *3* *fp*
 が ぼくをさらってゆく瞬間まで、

A *f parlando* *fp cantato*
 死が僕を攫って行く瞬間まで、

T *f* *fp*
 ぼくをさらってゆく瞬間まで、

B *f* *fp*
 さらってゆく瞬間まで、

Vln.

S *p*
 小鳥のやうに すなほに生きてゐたいのだが……。

A *p*
 小鳥のやうに すなほに生きてゐたいのだが……。

T *mf* *p*
 ぼくは小鳥のやうに すなほに生きてゐたいのだが……。

B *p*
 小鳥のやうに すなほに生きてゐたいのだが……。

senza tempo

Vln.

p *pp* *mf*

S

A

T

B

Vln.

pp *mp*

attacca

2.

p = ca. 60

Vln. *p*

Vln. *p*

S *p* 想像する。 —

A *p* 地球を 想像する。 —

T *p* ねむれない 寝床で、 —

B *p* ふ と 僕は ねむれない

Vln. *p*

S *p* ぞく ぞく と

A *p* ぞく ぞく と *mf* 侵入してくる。 —

T *mf* 夜の冷たさは *p* ぞく ぞく と *mf* 侵入してくる。 —

B *mf* 僕の寝床に

Vln. *f* *p*

S *f* *pp*

A どうして どうして *f* *pp*

T どうして どうして *f* *mf*

どうして僕は こんなに冷えきっているのか。

B tutti 【僕の身軀、僕の存在、僕の核心、

mf

こんなに冷えきっているのか。

Vln. *pp* *p*

S *p*

A *p* *f* 5

T *solo parlando* *f* 3 *cantato* *tutti p*

ぼくはぼくを生存させてゐる 地球に 呼びかけてみる。

B *mp*

呼びかけてみる。

S *p*
 すると 地球の 姿が ぼんやりと

A *p*
 地球の 姿が ぼんやりと

T *p*
 姿が ぼんやりと

B *p* *mp* 3 3 *stacc.*
 ぼんやり ぼくの なかに浮かぶ。

Vln. *p*

S *f* *mf* *mp*
 あはれな 地球、 冷えきった だいちよ。

A *f* *mf* *mp*
 あはれな 地球、 冷えきった だいちよ。

Vln. *pp*

S *mf*
 何億 万年 後の 地球 らしい。

A *mf*
 何億 万年 後の 地球 らしい。

T *mf*
 何億 万年 後の 地球 らしい。

B *solo parlando* *mf* 3 3
 だがそれはぼくのまだ 知らない

Vln. *gliss.* *mf* 3 3

S *p*
 仄暗い 一塊の 別の 地球が 浮かんでくる。

A *p*
 仄暗い 一塊の 別の 地球が 浮かんでくる。

T *solo parlando* *mf* 3
 ぼくの眼のまえには再び *tutti p*

B *p*
 仄暗い 一塊の 別の 地球が 浮かんでくる。

Vln. *pp* 3

S *mf* *f*
 その円球の うち側の 中核 には

A *mf* *f*
 その円球の 内側の 中核 には

T *tutti mf* *f*
 その円球の 内側の 中核 には

B *mf* *f*
 その 円球の 内 側 の 中核 には

S *f* 真赤な 火の塊が とろとろと 渦まいてゐる。 *f* あの 鎔 鋳 炉のなかにはな に が 存在

A *f* 真赤な 火の塊が とろとろと 渦まいてゐる。 *f* あの 鎔 鋳 炉のなかにはな に が

T *f* *f* 鎔 鋳 炉のなかには 何

B *f* *f* あの 鎔 鋳 炉

S *pp* *senza tempo* *p* する の だらうか。 *pp* *p* まだ発見されない 物質、

A *pp* *p* 存在 する の だらうか。 *pp* *p* まだ発見されない 物質、

T *pp* *p* が 存在 する の だらうか。 *pp* *p* まだ発見されない 物質、

B *mf* *pp* *p* なにが _____ *pp* *p* まだ発見されない 物質、

Vln. *a tempo* *p* *mf*

S *mp* *pp* *a tempo*

A *mp* *pp* *mp* まだ発想されたことのない神秘、 *pp* *mp* そんな ものが 混ざって いるのかも もしれない。

T *mp* *pp* *mp* まだ発想されたことのない神秘、 *pp* *mp* そんな ものが 混ざって いるのかも もしれない。

B *mp* *pp* *mp* まだ発想されたことのない神秘、 *pp* *mp* そんな ものが 混ざって いるのかも もしれない。

Vln. *ff*

S *f* *ff*
この世は 一たい ど う

A *mf* *f* *f* *f* *f* *f* *f* *f*
そし て、それらが一齊に 地表に 噴きだす とき、 なるの

T *f* *ff*
一齊に 地表に 噴きだす とき、 ど う

B *f* *f* *f* *f* *f* *f* *f* *f*
地表に 噴きだす とき、 なるの

Vln. *mf* *p*

S *pp*

A *p* *p* *p* *p* *p* *p* *p* *p*
だらうか。 人 々はみな 地下の 宝庫を夢みて いるの

T *f* *p* *p* *p* *p* *p* *p* *p*
だらうか。 人 々は みな 地下の 宝庫を夢みて いるの

B *p* *p* *p* *p* *p* *p* *p* *p*
だらうか。 地下の 宝庫を夢みて いるの

Vln. *p*

S *mf*
破滅か、救済か、何とも知れない未来にむかって……。

A
だらう、

T
だらう、

B
だらう、

Vln. *3*

S
だが、人々の一人一人のこころの底にしずかな

A
だが、人々の一人一人の心の底にしずかな

Vln.

S *5*
いずみが鳴りひびいて、人間の存在の一つ一つが何ものによっても粉碎

A
いずみが鳴りひびいて、人間の存在の一つ一つが何ものによっても粉碎

S
されない時が、そんな調和がいつかは地上におとずれてくるのを、

A
されない時が、そんな調和がいつかは地上を訪れてくるのを、

S
 A
 T
 B

ゆめ みてゐたやうな 気がする。

ゆめ みてゐたやうな 気がする。

僕は 随分 昔 から ゆめ みてゐたやうな 気がする。

僕は 随分 昔 から ゆめ みてゐたやうな 気がする。

S
 A
 T
 B

attacca

3.

♩ = ca. 60
pizz.

Vln. *sempre p calmando*

S *parlando f* *mf cantato*

A *p* *mf parlando* *cantato p*

T *mf* *mp*

B *mp* *mf*

にち 前 の
ワ ぼつ オ
ぼ オ
く オ
僕は 日没前の

Vln.

S *mf* *mp*

A *mf* *mf* *p*

T *mp* *mf* *p*

B *mf parlando*

街 道 を あるいて
— ゆっ くりと ある。
— あるいて こと が
— ゐた
街道を ゆっくりと歩いてゐたことがある。

Vln. *mf* *senza tempo*

S *mf*

A *mp*
部分
があった。

T *T solo*
【僕の眼がわざと、そこを撰んでつかみとったのだらうか。

B

部分があった。僕の眼がわざと、そこを撰んでつかみとったのだらうか。

S *a tempo* *p*

A *mf* *mp* 3

T *tutti mf* *f* *mf*

B *mf* *mp*

ひかりが
ひかりが
立ちならぶ
すっきりと

しかし ぼくの眼は、 落葉樹の上
しかし、僕の眼は、その青い光が すっきりと立ちならぶ落葉樹の上に

S *mf* *mp* *mf*

A *mf* *mf* *p* *mf* *p*

T *p*

B *mp parlando*

ふりそそいである 木々は すらりとした姿勢で、
あるのを 知った。 木々は すらりとした姿勢で、
木々は
に すらりとした
ふりそそいであるのを知った。 木々は すらりとした姿勢で、

S *p*
いま しづかに何ごと

A *p*
いま しづかに何ごと

T *p* *parlando*
いま しづかに何ごと かが

B *p* *parlando* *p cantato* *pp*
しづかに何ごと 行はれて みるらしかった。

T solo *senza tempo*
【僕の眼が一本のすっきりした木の梢にとまったとき、

今しづかに何ごとかが行はれてみるらしかった。僕の眼が一本のすっきりした木の梢にとまったとき、

Vln. *a tempo* *pizz.* *p* *arco* *mf* *pizz.* *p* *arco* *mp* *f* *pizz.* *p*

A *mp*
大 きな
大きな

Vln. *arco* *mp* *arco* *mf* *pizz.* *p* *arco* *mp*

S *p* *mf*
枯 葉が はなれた。

A *p* *mf*
褐 色 の 枯 葉が 八 枝を はなれた 朽葉 は

T *tutti cantato* *f* *mp*
枝を 離れた。

B *mp* *f* *mp*
褐 色 の 枝を 離れた。 朽葉 は

褐色の朽葉が 枝を離れた。 枝を離れた朽葉は

Vln. *f* *pizz.* *p* *arco* *mp* *mf* *p*
 S *pp* *mf* *p*
 A *p* *mp* *p*
 T *mf* *p* *p*
 B *pp parlando* *mf cantato*

みきに添って
 滑り 墜ちて行っ た。 地面の
 まっ すぐ 滑り 墜ちて行っ た。 地面の
 行った。 そして 根元の—
 幹に添ってまっすぐに滑り墜ちて行った。 そして根元の地面の

Vln. *pizz.* *p*
 S *mf* *p* *p*
 A *mp* *p* *p*
 T *mp* *mp* *mp*
 B *p* *pp*

くちば 重なりあった。 何ものにも 喩へ やうの
 くちばのう え に 重なりあった。 それは 殆ど 何ものにも 喩へ やうの
 くちばのう え 重なりあった。 何ものにも
 重なり— あった。 喩へ
 朽葉の上に 重なりあった。 それは殆ど何ものにも喩へやうの

arco

Vln. *mp* *mf*

S *mp* *f* *mf* *mp* *p* *pp*

A *f* *mp* *p* *pp*

T *mf*

B

ない こ ず え から地面 までの距離の なかで、

ない こ ず え から地面 までの距離 のなかで、

微妙な そくど だった。

やうの ない

ない微妙な速度だった。 梢から地面までの距離のなかで、

pizz.

Vln. *mp*

S *mf* *ff* *dim.* *mp*

A *mf* *ff* *dim.* *mp*

T *mf* *ff* *dim.*

B *mf* *ff* *dim.*

枯れ葉 は おそ

枯葉 は おそ

あ の 一 枚 の 枯 葉 は

あ の 一 枚 の 枯 葉 は

あ の 一 枚 の 枯 葉 は、 恐らく

Vln.

S
 らく この 地上 の す べ て を 見 さ だ め て ゐ た に ち が ひ
mf *p* *mp*

A
 らく この 地上 の す べ て を 見 さ だ め て ゐ た に ち が ひ
mf *p* *mp*

T
 この 地上 の す べ て を 見 さ だ め て ゐ た に ち が ひ
mf *p* *mp*

B
 この 地上 の す べ て を 見 さ だ め て ゐ た に ち が ひ
mf *p* *mp*

この地上のすべてを見さだめてゐたにちがひない。
 この地上のすべてを見さだめてゐたにちがひない。

S
 な い。
p

A
 な い。
mp

T
 な い。
p

B
 な い。
p

attacca

4. ♩ = ca. 60

arco (Alban Berg: Violin Concerto)

Vln. *p* *mp*

S *p* *mp*
まひるのむ

A *p* *mp*
まひるのむ

T *mp*
ぼくは

B *p*
いましきりにゆめみる、

Vln. *pizz.* *p* *cresc.*

S *f* *mf*
ぎばたけから飛びたって、おほぞらに舞ひ

A *f* *mf*
ぎばたけから飛びたって、おほぞらに舞ひ

T *mf* *f*
あおく焦げるおほぞらに

B

arco

Vln. *ff* *p* *mf*

S
のぼる ひばりのすがたを……。

A
のぼる ひばりのすがたを……。

T
mf 舞ひのぼるひばりの姿を……。 *solo parlando* *mf* (あれは死んだお前だらうか、 *p*

B
mf 舞ひのぼるひばりの姿を *solo mf cantato* それとも

Vln. *p* *pp* *mf*

S
mp ひばりはたかくたかく— *f* *mf* *3*

A
mp ひばりはたかくたかく— *mf* *3*

T
tutti mp cantato ひばりはたかくたかく—

B
mp parlando ひばりは
ぼくのイメージだらうか)

Vln.

S
— 全速力で無限にたかくたかく進んでゆく。 —

A
全速力で無限にたかくたかく進んでゆく。そして今は

T
— 一直線に 無限にたかくたかく進んでゆく。 — 今は

B
f tutti 一直線に 無限にたかくたかく進んでゆく。そして今は

Vln.

S
もう昇ってゆくのも 墜ちてゆくのも ない。ただ生命の燃焼がパツと光を放ち、

A
もう昇ってゆくのも 墜ちてゆくのも ない。ただ生命の燃焼がパツと光を放ち、

T
もう昇ってゆくのも 墜ちてゆくのも ない。ただ生命の燃焼がパツと光を放ち、

B
もう昇ってゆくのも 墜ちてゆくのも ない。ただ生命の燃焼がパツと光を放ち、

Vln.

S
すでに生物の限界を脱して、ひばりは一つの流星と なってゐるのだ。——

A
すでに生物の限界を脱して、ひばりは一つの流星と なってゐるのだ。——

T
生物の限界を脱して、ひばりは一つの流星と なってゐるのだ。

B
生物の限界を脱して、ひばり——りは一つの流星と なって (あれは *solo mf parlando*)

Vln. *arco*
p *f* *p*

S
— だが、*p* 心願 *mf* のすがたにちがひない。

A
— だが、*p* *mf* 心願— 姿にちがひない。

T
p だが、僕の心願 *mf* 姿にちがひない。

B
僕ではない。 *tutti mf* 心願 *mf* のすがたにちがひない。

Vln.

Soprano (S):
すべての刹那が美しく充実して

Alto (A):
一つの生涯がみごとに燃焼し、

Tenor (T):
すべての刹那が美しく充実して

Bass (B):
一つの生涯がみごとに燃焼し、

Dynamic markings: *pp*, *p*

Vln.

Soprano (S):
あなたなら……。 *pp*

Alto (A):

Tenor (T):
pp

Bass (B):
あなたなら……。 *pp*

Dynamic markings: *pp*

原民喜「心願の國」より

1 夜あけ近く、僕は寢床のなかで小鳥の啼声をきいてる。あれは今、この部屋に
屋根の上で、僕にむかっているのだ。小鳥たちは時間のかかぬ、さうだ、もう少しで、僕に
ふるへてゐるのだ。小鳥たちの言葉がわかりさうな。僕がこんど小鳥に生れかゝつて、小鳥たち
邪気に合図しあつてゐるのかもしれない。……僕がこんど小鳥に生れかゝつて、小鳥たち
あの小鳥たちの言葉がわかりさうな。僕がこんど小鳥に生れかゝつて、小鳥たち
れがわかるかもしれない。……僕がこんど小鳥に生れかゝつて、小鳥たち
て行つたとしたら、僕は小鳥たちから、どんな風に迎へられるのだらうか。その時
、僕は幼稚園にはじめて連れて行かれた子供のやうに、隅ついで、あたりをじつと見まはさ
らうか。それとも、世に拗ねた詩人の憂鬱な眼ざしで、あたりをじつと見まはさうと
するのだらうか。だが、駄目なんだ。そんなことをして、僕はもう小鳥に生
れかゝつてゐる。ふと僕は湖水のほとりの森の径で、今は小鳥になつてゐる僕
かつた者たちと大勢出あふ。

「おや、あなたも……」

「あ、君もゐるのだね」

寢床のなかで、何かに魅せられたやうに、僕はこの世ならぬものを考え耽けつてゐる。僕に親しかつたものは、僕から亡び去ることはあるまい。死が僕を攫つて行く瞬間まで、僕は小鳥のやうに素直に生きてゐたいのだが……。

2 ふと僕はねむれない寢床で、地球を想像する。夜の冷たさはぞくぞくと僕の寢床に
侵入してくる。僕の身軀、僕の存在、僕の核心、どうして僕はこんな冷たい
いるのか。僕は僕を生存させてゐる地球に呼びかけてみる。すると地球の姿がぼんやり
りと僕のなかに浮かぶ。哀れな地球、冷えきつた大地よ。だが、それは僕のまだ知ら
ない何億万年後の地球らしい。僕の眼の前には再び仄暗い一塊りの別の地球が浮んで
くる。その円球の内側の中核には真赤な火の塊りがとろとろと渦巻いてゐる。あの鎔
鉦炉のなかには何が存在するのだらうか。まだ発見されない物質、まだ発想されな
いのない神秘、そんなものが混つてゐるのかもしれない。そして、それらが一齊に地
表に噴き出すとき、この世は一体いどうなるのだらうか。人々はみな地下の宝庫を夢
みてゐるのだらう、破滅か、救済か、何とも知れない未来にむかつて……。

だが、人々の一人一人の心の底に静かな泉が鳴りひびいて、人間の存在の一つ一つ
が何ものによつても粉碎されない時が、そんな調和がいつかは地上を訪れてくるのを
、僕は随分昔から夢みてゐるやうな気がする。

3 僕は日没前の街道をゆつくり歩いてゐたことがある。ふと青空がふしぎに澄み巨
つて、一とこ貝殻のやうな青い光を放つてゐる部分があつた。僕の眼がわぎと、そ
こを撰んでつかみとつたのだらうか。しかし、僕の眼は、その青い光がすつきりと立
ならぶ落葉樹の上にはふりそそいでゐるのを知つた。木々はすらりとした姿勢で、今し
づかに何ごとかが行はれてゐるらしかつた。僕の眼が一本のすつきりした木の梢にと
まつたとき、大きな褐色の枯葉が枝を離れた。枝を離れた枯葉は幹に添つてまつすぐ
滑り墜ちて行つた。そして根元の地面の枯葉の上に重なりあつた。それは殆ど何もの
にも喩へやうのない微妙な速度だつた。梢から地面までの距離のなかで、あの一枚の
枯葉は恐らくこの地上のすべてを見さだめてゐるにちがひない。

4 僕は今しきりに夢みる、真昼の麦畑から飛びたつて、青く焦げる大空に舞ひのぼ
る雲雀の姿を。 (あれは死んだお前だらうか、それとも僕のイメージだらうか) 雲
雀は高く高く一直線に全速力で無限に高く高く進んでゆく。そして今はもう昇つてゆ
くのでも墜ちてゆくでもない。ただ生命の燃焼がパツと光を放ち、既に生物の限界
を脱して、雲雀は一つの流星となつてゐるのだ。 (あれは僕ではない。だが、僕の心
願の姿にちがひない。一つの生涯がみごとに燃焼し、すべての刹那が美しく充
つたなら……。)